
ツーハンデッド・ポルカ

ここと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツーンデッド・ポルカ

【Nコード】

N1433C

【作者名】

ここと

【あらすじ】

魔法は全く使えない、剣の腕は中途半端、だけど容姿端麗、そんなお嬢様に拾われた一人の少年

第1話 剣と女性

断末魔の叫び声のような酷い歌声で目が覚めた。

あまりの酷い歌声に僕は力いっぱい耳を塞いで身を起こす。

するとそこには見知らぬ森の中で、池の辺に座って歌う1人の少女がいた。

木々の隙間から差し込む光で、腰ほどまであるブロンドの髪と雪のように白い肌が神々しく輝いている。

年頃はたぶん十代半ば、しかしそれにしては鋭い目鼻立ちをした美しい少女だった。

その凜とした顔立ちからは冷い印象を受け、近付きにくい雰囲気を出している。

座っていた彼女は無表情ながらも、美しく伸びた足を水の中で楽しそうにバタつかせていた。

僕は耳を塞ぎながらも彼女に見とれてしまう。

少しすると彼女は僕の視線に気付いたのか歌うのを止めてくれた。少し顔を赤らめて、それでいて恥ずかしがる様子も無く、平然な

顔付きで彼女はゆっくりと立ち上がると、僕の方へと歩いてくる。

僕も慌てて近くの木につかまって立ち上がる。

「……」

彼女の少し赤らんだ顔が、僕の目の前まで来ると真っ赤になってしまう。

僕は不思議に思いよく見てみると彼女は服を着ておらず、いわゆる素っ裸だった。

予期せぬ彼女の裸に自然と顔が赤らんでしまう。

そんな僕を、彼女は殺気に満ち溢れた目で睨み付けていた。

「変態!!!!!!!!!!!!!!」

突然、彼女の拳が唸りをあげる。

彼女の拳は綺麗に鳩尾に入り、僕は声を出すことも出来ずに気を

失ってしまっ。

「ちよっ、ユリス様！？刃物はダメですって！！……うげっ」

僕はその物騒な言葉で目が覚める。

目を開けるとそこには見知らぬ部屋の中で、さっきの少女が2m近い大剣を僕に突きつけていた。

隣には女性がお腹を抱えてうつむきに倒れている。

「え？」

「……死ね、変態」

無表情の彼女が冷たく言い放つ。

そう言う彼女の目は本気だった。

しかし、目の前に突きつけられた剣を回避するのは不可能に近い。

……やばい、死ぬのかな？

縁起でもないことが頭によぎると、彼女は優しい笑顔で僕を見る。

「冥土の土産」

普段なら見とれるような笑顔も、この状況では悪魔の微笑みとしか言えない。

当然のように死にたくない僕は、必死に逃げる方法を考えた。

「そ、その、僕なんか悪いことしたの？」

咄嗟に出てきたことを言う。

しかし、よく考えるとこんな時間稼ぎにしかない。

というよりも、今の彼女が答えてくれるだろうか？

「……本気で言ってるの？」

「は、はい」

僕が思いつきり首を縦に振ると、目の前に突きつけられた剣が喉元にまで迫る。

その剣の冷たい感覚がすると、思わず悲鳴を上げてしまつと共に僕の体中からは汗が噴出す。

逃げようと思ひ背後に手をやると、そこには何か硬いものが刺さ

っていた。

逃げ道は絶たれてるみたいだ……。

「そんな女装してまで私の裸を見て、しかも見たくもないあんたの裸まで見せておきながら、よくそんな事が言えるわね」

息を荒げて彼女がそう言うのと、剣の先が少し喉元に食い込む。

とりあえず死にそうなので、僕は逃げられる最大の範囲まで後退りしておく。

そして何故か自然に出てくる笑顔で、彼女を見つめる。

「あの、確かに裸見ちゃいましたけど、僕女装とかしてないですし……」

そう言う僕を、彼女は再び優しい笑顔で見つめる。

しかし、その笑顔は凄く怖い。

「本当のこと言っただけで、鬼のように謝罪すれば、今この場で殺してあげる」

「本当のこと言っただけですけど……」

「嘘ついたら、針1万本付いた拷問用椅子に座らせて、鞭で叩きつ、水責め&火あぶりです1ヶ月かけてジワジワと殺してあげる」

そう言いながら、彼女は僕が後退りした分歩みよって来る。

当然その分剣も近寄って来る訳で、再び僕の喉元に剣が迫る。

あまりの恐怖に額から汗が垂れてきた。

そんな僕を見て、彼女は剣を振るう。

すると僕の視界に入っていた前髪が、膝辺りに全部落ちる。

「その長い後ろ髪も切ってあげようか？」

「え？」

片手で後ろ髪を掴んで、見てみる。

すると確かに金の長い髪が一つに結わいてあった。

恐る恐る彼女を見上げる。

「それは女装ですか？」

「あ、あの、わかんないです」

「なんで？」

僕の股の間に、剣が音を立てて突き刺さる。

しかし、そんなこと言われても分からないものは分からない。

僕は彼女を見上げてみた。

そして、彼女の悪魔のような笑い顔を見て、すぐに下を向く。

「どうしたの？」

「あの僕、気付いたらあそこに倒れてまして。それに、自分の事もよく分からなくて」

本当の事なんだけど、信じて貰えないだろうな。

床に刺さった剣が抜かれる。

「嘘は嫌いよ」

あ、ヤバイ。これ死ぬな。

第1話 剣と女性（後書き）

初小説でした
感想欲しいです。
おねがいします

第1話 剣と女性2

彼女の冷酷な表情を見ると、自然と目から涙が出て来た。

しかし、彼女は表情を崩さずに、再び剣を振るおうとする。

僕は恐くて、目をつむる事しかできない。

「さよなら」

彼女は冷たく言い放つ。

たぶん、世の中にこんなに恐ろしい『さよなら』はないだろう。

僕は力一杯目をつむり、ただ切られるのを待つ。

無実なのに殺されるなんて、僕はなんて不幸なんだろう。

死にたくないな……。

その時、突然大きな鐘の音が鳴り響く。

「……ちっ」

微かに目を開けると、彼女はその場に止まっていた。

そして、振りかざした剣を思いっきり足元に突き刺す。

彼女は僕を睨み付けると、倒れている女性に近づいていく。

「起きろ、キュラム！」

「はい、ただいま」

キュラムと呼ばれた女性は、お腹を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

たぶん20すぎの、長身の女性。

黒い髪を後ろで団子状にまとめ、白い力チューシャを身につけている。

あの恐い少女とは違い、丸っこい顔立ちをした、明るい感じがする女性だった。

そして彼女は、黒い服の上に白いエプロンを着けた、使用人のような格好をしている。

キュラムさんは体調が悪そうなのにも関わらず、背筋を伸ばし、お腹を押さえていた手も体の横で真っ直ぐ伸ばす。

そして、満面の笑みで口を開く。

「なにか御用ですか、ユリス様？」

「私は授業に行ってくる。その間コイツを見張っている」

「はい、かしこまりました」

僕と話している時も強い口調で話す彼女に、キュラムさんは嫌な顔一つしてない。

ただ、ニコニコしながら彼女を見つめていた。

彼女はキュラムさんに用件を伝え終わると、どこかへ行こうとする。

しかし、彼女はドアを開けて部屋を出る前に一端止まり、僕を睨み付ける。

「逃げれると思うなよ、変態」

そう言い残し、彼女は部屋を出て行った。

この後どうなるかわからないけど、とりあえずまだ僕は生きている。

そう思うと全身の力が抜けた。

僕は後ろに刺さっている何かにもたれ掛かる。

「はあ……」

大きく溜め息を付いて、改めて目の前に突き刺さった剣を見てみる。

柄の長い細身の剣、僕はこんなのを突き付けられてたのか……。

そう考えただけで背筋に悪寒が走る。

「大丈夫？」

キュラムさんが心配そうな顔で僕を覗き込んでいる。

僕は気が抜けてて言葉がすぐに出てこず、無言で頷く。

するとキュラムさんはあの少女とは違う、天使のような笑顔で手を差し延べてくれる。

彼女は特別美人という訳ではないのだけど、笑顔はあの少女より

も美しく感じた。

「あ、ありがとうございます」

僕は恥ずかしかったけど、差し出された彼女の手を握る。

彼女の手は少しザラザラしていて、男性のような固めの手だった。その手は使用人の仕事の大変さを物語っている。

手を見ていると、彼女は少し顔を赤らめて、僕を力強く引っ張り起こしてくれる。

「あんまり見ないで……」

「すみません！」

僕は慌てて手を放す。

すると、彼女は視線を横に向ける。

「と、とりあえず、剣を片付けるのを手伝って」

「はい！」

「じゃあ、アレとつといて」

彼女は僕の後ろを指差す。

そこには1mほどの両刃の剣が3本ほど刺さっていた。

僕はアレにもたれ掛かっていたのか……。

そう思うと少し恐かった。

しかし、そんな事考えていてもしょうがないので、言われた通り、剣を1本ずつ全力で引き抜く。

「剣は持っていくから」

そう言くと、僕が引き抜いて床に転がっている剣を、彼女は拾う。「私は剣を置いてくるけど、部屋から出ると危ないから逃げるのは止めといった方がいいよ」

彼女は笑顔でそう言い残し、少女が床に突き刺さした剣、それに僕が抜いた3本の剣を軽々と持って部屋から出ていく。

僕は一人、部屋に残されてしまった。

改めて部屋を見てみると結構広い部屋なのに、家具がベッドとタンス、鏡しか置いてない。

その中でも、銀色の枠をした大きな鏡が目につく。

僕は何気なく鏡の前に立ってみる。

鏡は僕の背丈よりも少し大きく、銀色の枠には竜のような模様が刻まれていた。

その鏡には、12、3才の、女の子と見間違えてしまいそうな可愛らしい顔をした、長い金髪の男の子が写っている。

「これが……僕？」

自分の姿を見ても、イマイチ信じられなかった。

よく覚えてないけど、僕はこんな姿をしていなかった気がする。だいたい、僕は男だったのか？

しかし、僕が右手を動かせば、鏡に写った僕の右手も動くので、鏡に写った姿は僕に間違えないようだ。

「ん……？」

僕は思わず首を傾げてしまう。

何か違う、そんな気がしてならなかった。

第1話 剣と女性2（後書き）

2回目

小説書くの大変だ

よかったです感想ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1433c/>

ツーハンデッド・ポルカ

2010年10月9日00時44分発行